

日本の生命倫理は 先端研究に追いついているか？



iPS細胞、クローン技術、キメラ胚……医療や生命科学は日々、飛躍的に進展しつつある一方で、倫理的、哲学的な課題を抱えています。
熊本大学 生命倫理研究会では、今回、研究不正の社会的構造と、ヒトES細胞研究の倫理性についてそれぞれ専門家にご講演いただき、先端研究と倫理について議論します。

3月9日(水) 14:00-16:30

熊本大学 附属図書館中央館

1F ラーニングcommons アクティブエリア

入場
無料

申込
不要

ヒト胚研究の倫理 町野朔 (上智大学名誉教授)

人の生命は何か？ それはいつ始まり、いつ終わるか？

私自身は、人の生命は受精によって始まり、死亡によって終了すると考えている。

ヒトES細胞研究の倫理性は「ヒト胚の倫理的地位」に関するものであり、Pro-Life vs. Pro-Choiceの対立の中で、国際的に大きな問題であった。しかし、日本では人の生命は何か、それはいつ始まり、いつ終わるかについての確たる考えがなく、あるいは、それは問題を考える上では不要な議論であるという考え方があり、議論は低調であった。不明確な人の命の外延、「おぼろな境界線」の特徴は、各種先端研究の規制法や指針の成立過程に現れている。



捏造の構造分析 西川伸一 (オール・アバウト・サイエンス・ジャパン代表理事)

科学論文の捏造の背景を分析する

2014年の小保方論文捏造事件は日本中を巻き込んだ大騒動になった。

大山鳴動が、研究倫理徹底という想像力の欠落した結論で終わってしまったこの事件を通して、我が国が、科学者社会、文科省、そしてメディアの全てに大きな問題を抱えていることを私は実感した。

科学論文の捏造の背景の分析について紹介するとともに、では何をすべきか提言したいと考えている。



【問合せ】熊本大学 大学院先導機構 URA推進室 (担当：若松・藤山・福田)

096-342-3303 research-coordinator@jimu.kumamoto-u.ac.jp

【共催】人文社会科学系国際共同研究拠点・生命科学系国際共同研究拠点

サイエンスの日々めまぐるしい進化に、 人の心は追いついているのだろうか。



町野朔
(上智大学名誉教授)

1966年、東京大学法学部卒業、同助手。

1969年から上智大学に勤務。法学部、法科大学院、生命倫理研究所教授を経て、2014年定年退職。現在、上智大学名誉教授。



西川伸一
(オール・アバウト・サイエンス・
ジャパン代表理事)

1948年滋賀県生まれ。京都大学医学部卒業。医学博士。熊本大学医学部形態発生部門教授、京都大学医学研究科分子遺伝学部門教授、理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター 副センター長を経て、2013年よりNPO法人 オール・アバウト・サイエンス・ジャパン (AASJ) 代表理事、京都大学名誉教授、JT生命誌研究館顧問。

推薦図書



『ヒト由来試料の研究利用』
町野朔、辰井聡子著
上智大学出版



『バイオバンク構想の法的・倫理的検討』
町野朔、雨宮浩著
上智大学出版



『不死細胞ヒーラ』
ヘンリエッタ・ラックスの永遠なる人生
レベッカ・スクルート著 中里京子訳
講談社



『生命倫理の希望』
開かれた「バンドラの箱」の30年
町野朔
上智大学出版



『生と死、そして法律学』
町野朔著
信山社

推薦ホームページ



Yahooニュース・個人
「捏造の構造分析」
<http://bylines.news.yahoo.co.jp/nishikawashinichi/>



JT生命誌研究館ホームページ
「進化研究を覗く」
<http://www.brh.co.jp/communication/shinka/>



AASJホームページ
「論文ウォッチ」
aasj.jp

熊本大学 黒髪北地区 附属図書館中央館
〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

